

## 孤絶の歌としての大塚金之助

田 中 秀 臣

### はじめに—大塚金之助の短歌の問題圏—

大塚金之助（1892-1977）は、社会経済思想家として著名であるとともに、その活動の中心に短歌の創作活動があることでも知られている。島木赤彦に見出され、アララギ派の中心メンバーとして活動した後、無産者短歌論を発表し歌壇に大きな衝撃を与える。その後は、マルクス経済学を基本にした社会経済思想を唱え、また実践活動に傾斜する。他方で、事実上短歌の創作活動をいったん終える。大塚が再び、短歌に取り組むのは、彼が治安維持法違反で収監され、有罪判決を受けた受刑時代である。その後、釈放され敗戦を迎え、生前ただひとつの短歌集となった『歌集 朝あけ』（1947）を出すまでが大塚の短歌人生のほぼすべてである。没後に歌集『人民』（1979）と、また経済学などの業績や未発表のものを含む総ての短歌を収録した『大塚金之助全集』全10巻（1980-1）が刊行されている。

大塚の短歌の性格は、いままで三つの局面から捉えられてきた。東京高等商業学校（現一橋大学）で教授職を務め、やがて20代後半にドイツへの留学の機会を与えられる。この滞独時代に、大塚はドイツの社会的混乱に翻弄され異邦人としての孤独に陥る。短歌という表現形式は、この異国での孤独によって裏打ちされ生み出されたものである。この留学時代の短歌の性格は、自分という孤独な存在を自然との関係においてとらえた「一つのドラマ」という解釈が可能である。ただしこの「一つのドラマ」は、自己と自然の中に閉塞しているのではない。自己と社会との関係について距離を置いて見つめ、自身の社会を見

る眼の転換をはらむものだった。本稿ではこの時代の大家の短歌をこのような意味での「孤独の歌」としてとらえる。

帰国後、大家はアララギ派の歌人として注目される一方で、専門とする経済学では、オーストリア学派の数理的経済学やマーシャルらの新古典派経済学からマルクス経済学に立場を転換する。と同時に、短歌制作においては当時の歌壇に衝撃を与えた無産者短歌論をもって、事実上その創作活動をいったんは終える。ただしこの無産者短歌論における「プロレタリア的自意識」に多くの論者たちは注目してきた。

第三のそして最後の局面は、入獄の時代とその後の敗戦直後までの生活の日々での創作活動である。従来の大家短歌論では、この時代はファシズムの圧政による受刑生活、その後の警察権力による監視の下での困窮時代は、先ほどの無産者短歌論での立場をかえない闘士的な姿、つまり「プロレタリア的自意識」の貫徹としていままで解釈されてきた。敗戦とともにファシズム的な圧政からの解放によって、この圧迫された時代の短歌が世に出て、そこで大家の短歌人生が完結するというストーリーである。

従来の解釈では、第二の局面と第三の局面がひとつの連なりになっている。例えば、歌人の坪内哲史は以下のように整理している。

「無産者短歌」を発表した金之助が、その裏づけとなる作品を提示したのは、彼が入獄してからのことである。さらに出獄後の本音の歌、修羅の歌など、「無産者短歌」論の内容を、実作によって肉づけし、おしひろげ、自由に、独自の展開しようとしている」<sup>1</sup>。

坪野は無産者短歌の裏付けとみているが、むしろ獄中の歌から出獄後の歌は、「孤絶」の歌であり、それは階級的図式からは離れていることを本稿では明らかにする。ここでいう「孤絶」とは、社会や階級への帰属意識からの断絶、人と人とのつながりが断ち切られた状況での意識である。その限りでの自己のアイデンティティの喪失感にも結び付く。

このような「孤絶」は、自分が自らの選択で人間同士の関係から距離をおき、

自分と自然、そして社会との関係を冷静に見つめなおす契機を含んだ「孤独」とは異なる。「孤絶」は、ハンナ・アーレントが『全体主義の起源』（1955）の中で記述した全体主義社会の中で個人が直面する「見捨てられているという状態」Verlassenheit に等しい。大塚の獄中から出獄後までの短歌は、この孤絶＝見捨てられているという状態のひとつの強い表現形式である。無産者短歌が内包する「プロレタリア的自意識」との断絶が、この「孤絶」の時代の大塚短歌の特徴といえる。収監時代そして出獄後の戦時下の生活において、社会的な存在としては「死」を宣告されたものとして生きた。その生きざまの記録として、大塚は短歌だけにその思いを込めたといっている。その意味でこの獄窓から出獄後の時代の孤絶の歌は、大塚そのものの存在を賭したものだといえるだろう。それが本論文の表題にした「孤絶の歌としての大塚金之助」の意味である。以下では、大塚の短歌世界をその初期の孤独の時代から、孤絶の時代に至るまでを順を追って見ていこう。

## 1 ドイツ時代の孤独の歌

大塚金之助は、1892年に東京府神田に生まれ、1977年に84歳で没した。大塚の父親は公務員で、建築関係の技術職であった。幼少期の大塚は植物採取に強い興味を持ち、その情熱はドイツ留学時代に短歌世界のひとつのベースにもなっている。

大塚は神戸高等商業学校に入学し、そこで坂西由蔵のゼミナールに所属する。坂西は当時の経済学界の第一人者福田徳三の弟子であった。大塚はここでふたつの業績を残している。卒業論文の『「スラヴ」人の原始所有権』であり、もうひとつは無政府主義者のエマ・ゴールドマン（1869-1940）を論じた「主義者『ゴールドマン』」である。この論説は、大塚が大逆事件（1910-11）への抗議の意味を込めて書いた一文であった。なぜならゴールドマン自身が米国から大逆事件における幸徳秋水らの処刑に強い反対を表明していたからだ。だが、この論説を『神戸高等商業学校校友会』（58号、1912年）に寄稿したことで、

大塚は学校側から譴責処分をうけ、特待生の地位を奪われてしまう。この大塚のゴールドマン論を発表した行為そのものに、彼の社会改革に対する熱意とまた孤立を恐れない態度が表現されていた。

大塚が坂西の指導の下で書いた卒論は、ドイツ歴史学派の影響を強くうけていて、それは市場とその前提である所有権制度に焦点を絞ったものである。大塚の学術的な立場は「社会経済思想」と呼称されることがあるが、それは経済の前提である社会制度を歴史的な視座の下で相対評価し、その進展と改革を志向する立場であった。この社会経済思想の萌芽は卒論にも表れている。後年、大塚は師の坂西（病で盲目になったが夫人の助けで教授を全うした）についていくつもの歌を詠んでいる。

いまはたゞころかなしく寄るわれの聲のありかに向きなほらすも<sup>2</sup>

坂西の紹介で神戸高商時代に福田徳三の面識を大塚は得ていた。その縁もあって大塚は、東京高等商業学校に入学（1914年）し、やがて福田徳三のゼミナールに所属する。福田の指導は厳しかったが、そこで卒業論文「村落団体二閔スル学説ノ研究」（1916）をまとめる。この著作もまた市場形成が直面する社会的制度を説明しているものであった。そのまま母校の講師になり、やがて25歳の若さで教授になる。師の福田徳三の影響だと思われるが、大塚はまずアルフレッド・マーシャルの『経済学原理』訳業に取り組む。大塚の学者としての経歴は、まずマーシャルらの新古典派経済学の紹介や、オーストリア学派の数理的経済学への関心として始まる。

1919年から1923年にかけて大塚はニューヨーク、ロンドンを経て、ベルリン大学に留学する。ドイツ歴史学派の大家であるヴェルナー・ゾンバルトの指導をうけ、またメンガー文庫を母校のために購入する手伝いをするなど、勉学では充実していたように思われる。だが、ここで大塚はより孤独を深めることで、短歌に出会い、そして彼の学問転換を迎える。

当時のドイツは第一次世界大戦の敗北をまだ色濃く引きずり、ベルリンの街には失業と高いインフレによる困窮が充ち、ストライキ、デモ、そして暴動などが頻発していた。

「児童の健康は殊に悲惨であつた。五年に互る英国の餓死封鎖と二年に互る革命時代の貨幣減価と物価革命とは独逸児童の肉体と心情とを破壊した」<sup>3</sup>。

大塚も留学当初に、食糧事情の悪化から栄養不良を起こした。またのちには腎臓を病んでしまう。気分も暗鬱としたものに陥った。

「毎年春になると独逸の社会生活はうめき始める。中部独逸の諸都市が共産主義者に占領され、工場・郵便局・停車場・市役所・警察署の上に赤旗が翻へり、鎮圧に向つた軍隊が工場に向つて大砲を向けたのも春であつた。(略)かかる社会生活の死の舞踏は一々脈を打つて若い社会学者の胸に響かねば已まなかつた。なぜならば社会学者は社会生活を生きる者であつて、単なる自我生活を生きるものではないからである」<sup>4</sup>。

都市の生活は大塚の心を蝕んだが、他方でベルリン郊外の自然は彼を群衆から遠ざけ、自分の心を自然とのつながりで見つめなおすことで安らぎを得ていく。

「ぼくは、しずかな森のなかを歩いたり、丘の草の上にねころんで文芸書を読んだり、湖のふちへ出て日光を反射する水に眺め入ったりした。第一次世界大戦では、日本はドイツの敵だったし、日本学生にとってドイツはそう住みよくはなかったから、ぼくはますます孤独を愛するようになり、ニューヨークにもロンドンにもなかったこのやすらかな自然をこよなく愛していた」<sup>5</sup>。

ここでの孤独の体験は、人と人との関係に心を煩わすのではなく、人とそれよりも大きいもの＝自然との比較を行うことで、自然の中で自分がなんたるかを知ること結びつく<sup>6</sup>この孤独体験は、大塚を歌作に走らせることになる。特にその初期の歌には、人と自然との関係を謳うものが多く、また自然の中では白樺がテーマのものが多<sup>7</sup>い。

白樺の木肌見守りつつ森にふかく入りてかくるとするところかも  
草ふかき白樺道にかくれ行く我れをおもへばあゆみはおくる

この白樺をモチーフにした短歌を、ペンネームの遠見一郎でドイツから朝日新聞の歌壇に投稿した。一連の投稿作は選者であったアララギ派の大家、島木赤彦の目にとまる。

白樺の葉がくれにして咲く花の薄白くして春は来にけり

この作品に付された島木赤彦の評は次のようなものだった。

「作者独乙にありて盛に歌をよせらる。此の歌異国の風物を捉へて遊子の情調自ら至るものあり。葉かくれの白き花清楚にして寂寥。時春にして感懐自ら動けるを見るべし。羈旅の歌上古に秀品多くして近代に少し。艱苦を嘗むると然らざるとに起因すべし」<sup>8</sup>。

ベルリン時代から島木の死（1926年）に至るまで、ふたりは師弟関係を結び、その信頼の絆は強かった。ベルリンから送られてくる短歌の数々に島木は温かい目で「指導」を重ねていく。島木赤彦の短歌の立場は、アララギ派の始祖である正岡子規の写生説やリアリズムを継承しつつも、その歌作の価値基準として万葉集を尊重していた。島木が万葉集から読み取った規範とは、例えば「自己の真実に徹せんとするところの態度からおのずから生まれてくる現象であって、歌における写生の極致はかかるところにある」<sup>9</sup>とする態度である。

武田弘之は、島木の歌は植物や自然への同感があるばかりだが、大塚の白樺の歌には「自然対人間の一つのドラマ」がある、と指摘している。さらに「赤彦が「自然」へ向かったのに対して、金之助は人間の「ところ」へ向かった」とする<sup>10</sup>。武田の解釈に比して、坪野哲久はむしろ大塚のベルリン時代の歌作はアララギ派のリアリズムを学ぶ一方で、あくまで習作的であり、そして人間に向かうことを避けているところに、大塚の留学時代の苦悩を見出すことがで

きる、という解釈を提起している<sup>11</sup>。

ベルリン郊外の自然への傾倒は一見すると、社会や人間関係からの逃避に見えるかもしれない。だがそれは内面の混乱からの逃避であって、混乱をもたらした事象（ベルリンの社会問題や人間関係）そのものからの逃避ではない。混乱から一時身を離すことで、混乱の原因となったものに冷静に向き合う時間をもうけること。そのことによって自然と人間、社会と人間との関係を距離感をもって省察することができる。大塚のこの時期の歌作に歌われた「孤独」は、社会的なものへの関心を常に伴っていた。

異国（ことくに）をさすらひ歩むひとりびとあきらめ心すでに過ぎをり

このような異国での孤独はまた同時に、次のような社会の弱者への目線と並行していて、そこから逃げることはしていない。

ほほけつる乞食の面（おも）にはかにもうれしき筋のふるへいずるなり

人間そのもの、そして社会問題への関心が歌作の意欲と同時に高まってくる。大塚は上田貞次郎宛の手紙の中で留学の延長理由を次のように書いている。

「それは社会科学の研究基礎をしつかりきづくといふことと、人間（思想家）としての素養をもう少し作りたいからであります」<sup>12</sup>。

ただしこの人間や社会の関心の「研究基礎」は、必ずしも彼が当初の留学目的としていた、オーストリア学派の先端的な「数理経済学」を学ぶことで実現されるものではなかった。ここに学問的な「孤独」が訪れてもいる。

「家に帰るとそこには「理論」が待つていた。その理論の待つ数学式には深厳な数学味もなく、凡てが死であつて生命の響きも流れもなかつた」<sup>13</sup>。

「この春がもたらした最大の傷手はわが精神の分裂である。それは私の仕事と私の性格との不調和であり、「理論」と「生活」との激しい争闘である。私

の仕事は経済「理論」の研究であつた。この「理論」にも色々あるが、私の研究しつつあつた「理論」はその中の純粋型とも言ふべき数理的「理論」であつた。所謂数理派経済学である。この派の経済学は力学的世界観の上に立つて生活内容を極力抽象し、それ自体としても余り美しくない数学公式を用ひて吾々の経済生活を数理化し、この公式の延長と組合せとによつて公式建築物としての社会生活を厳然と打ち立てる。そこに動く人間は「快樂機械」（故エヂウォース教授の自用語）であり、そこに動く生活は機械の運転であり、そこに流れるものは血ではないのは勿論「薄められたる汁」（ディルタイの言葉）でさへもなく、単なる数量的の財である。（略）理論はメフィストを待つ迄もなく灰色である」<sup>14</sup>。

「数理派経済学」の重要性を自覚する一方で、「併し私の研究はこの砂漠世界を乗り越すことを命じて動かなかつた。そして窓外にはさびしい白樺の枝の間にも春が蠢めいて見える。社会生活の動揺は日々私を根こそぎ揺り動かさねば已まぬ。凡ゆる生活内容は革新されようとし、政治の革命は凡ゆる文化領域に於ける革新に向つて伸びつつある」<sup>15</sup>との思いを強くしていく。ここでも「白樺」と自身の「孤独」な境涯が重なって記述されていることを見逃すべきではない。このときの「孤独」とは、社会生活を「数理派経済学」ではない、新たな視座でみる決意と同義である。では、その新たな視座とはなんだろうか？ 帰国後に本格化するマルクス経済学の研究にドイツ時代では至っていない。文学・音楽作品を極めることで大塚は新しい視座を得ようとしていた。

上田貞次郎に送った手紙の中にはこのときの研鑽が記されている（1921年12月4日）。

「この研究のひまには文学や詩をよんでをります。一番好きなのはシェクスピア、次はゲーテ、シラー、スカンディナヴィアの人々（殊にビョルンソン）、ガルスウォーシー、ワイルド、ダンテ、ロシアの人々、などです。シェクスピアとゲーテだけはかへるまでに全集の大部分をよみ了りたいと思つてをります」<sup>16</sup>。



例えば、ワイルドの作品の中に「貧困の苦痛」や「この苦痛は限界利用学旅の知らざる苦痛」であることを大塚は見出すのである<sup>17</sup>。

ドイツ留学時代は、自らが何であるのか、何ができるのか、というアイデンティティをめぐる問いを、当時の混乱したドイツ社会での体験、留学生としての異邦での心的・肉体的な苦勞、研究をめぐる深刻な疑問を背景にして深めていた時代だった。大塚のベルリン時代の「孤独」は、社会への強い関心と切り離せないものとして現れていた。そして短歌はこの「孤独」のひとつの表現形式であった。

## 2 無産者短歌と“歌のわかれ”

1924年の初頭に帰国後、大塚はアララギ派の歌人としての活動を積極的に行う。だがその詩作は、ベルリン時代と次第に異なる特徴を帯びていく。例えば、都会における孤独を歌う点では同じではあるものの、ベルリンの白樺＝自然との交感というよりも、自然を物象化し、時にそれを苛むことで自らの孤独を表現するものを書きもした。

人間の世にありければかまきりをころしてひとりなぐさみにけり  
くるしさのあまりにわれはかまきりを虫なればとてさいなみにけり

また学術研究は、帰朝してからは東京商科大学で経済学系の科目を教授する一方で、留学前からの懸案であったアルフレッド・マーシャルの『経済学原理』の完訳に打ち込んだ。この訳業は二年かけて全四巻で完成する。だが、完成に際して付した訳者序文を読むと、そこにはマーシャルから心が離れ、大塚の社会経済思想の基礎が次第にマルクスに向いていることがわかる。

「而して英国の資本主義経済は今日に於てはマーシャル経済学体系形成の時代と著しく相違して衰退的となり、無産階級の闘争心も当時の比ではない（尤も多くの労働貴族を生み出しはしたが）。従つて本書に展開されてゐる個々の

原理又は理論の中にはそのまま採り得ないものがある。例へばマーシャルの労働組合論は、既に現在に於てはそのまま受入れることは出来ないのである。又マーシャルはマルクスの弁証法的方法の鋭さを或る箇所には認めつつも、マルクス経済学体系の全体的評価をなすことを得なかつた。又その歴史観は著しく経済的なるにも拘はらず、経済発展を神に結びつけるかの感を起さしめてゐる。その他鋭く批判されるべき点が多い。これらは総てこの経済学体系の歴史的背景とマーシャルの中間的の立場とから来るものである」<sup>18</sup>。

ベルリン時代にも一端をみせていた、社会的弱者への視線もより明瞭になっていく。

深川のまづしき街のありさまをかたらふわれになみだをおほゆ

やがて1927年になると、「島木赤彦先生の死去、私の思想的転換などの原因もあつて、私は短歌製作をやめて」<sup>19</sup>、事実上アララギ派からは離脱してしまう。そしてマルクスの『資本論』『剰余価値学説史』を熟読し、また政治活動、消費者組合などの実践活動に傾斜していく。本格的なマルクス経済学と政治的実践活動に傾倒する直前に書いたのが、無産者短歌論である。大塚の無産者短歌論は、彼のマルクス経済学やまた消費者組合運動などの実践活動と結びついている。

以下では、この時期の大塚のマルクス経済学の解釈と、消費者組合活動などの実践を簡単に見たうで、無産者短歌論の特徴を解説する。大塚のマルクス経済学の特徴は、スターリンのお抱え経済学者であったエヴゲニー・ヴァルガと理論面ではまったく同じであった。今日「ヴァルガの法則」と呼称されるように、ヴァルガは資本主義経済が過剰生産（＝過少消費）を構造的に継続することで必然的に危機を迎えるとした。過少消費は、労働者の実質賃金が低下し続けること、そして海外植民地も農業問題の悪化により資本主義経済の経済的

余剰のはけ口として機能できないために生じる。この生産と消費の不一致が長期継続することで資本主義は一般的な危機を迎えていて、やがて共産主義経済にとって代わるだろう、というのがヴァルガの見立てであった<sup>20</sup>。

大塚は東京社会科学研究所の設立に関与し、そのメンバーを中心に経済批判会を組織し指導する。この経済批判会誌（大塚の監修）で、コミンテルンの機関紙『インプレコール』に掲載されていたヴァルガの論文を『ヴァルガ世界経済年報』（1928～36年）として刊行した。師である福田徳三もこの大塚監修のヴァルガの特に29年、30年の刊行分を高く評価していた。ヴァルガ的な見地は、大塚の以下の発言でも明瞭である。

「恐慌は資本主義につきものである。資本主義的生産様式は産業循環を行ひつつ自己運動する。この産業循環は「安静状態、活況増大、繁栄、過剰生産、恐慌、停頓、安静状態、等々」（マルクス）の諸局面の連続である。この産業循環の頂点である恐慌は、資本主義の根本的矛盾、生産力の発展と消費力の縮小とから来る」<sup>21</sup>

「世界大戦と共に、独占資本主義は一般的危機に入った。資本主義の矛盾は最も尖鋭になった。一般的危機を構成するものは、サヴェート同盟の存立、国内プロレタリアートの闘争の激化、大衆失業、国際農業恐慌等である」<sup>22</sup>。

特に世界大恐慌のさ中でもあり、当時『東洋経済新報』で論陣を張っていた石橋湛山のリフレッシュ政策にも反論を行い、石橋の理論的バックグラウンドであるカッセルやケインズに対しても痛烈な批判を浴びせた。この時期の大塚の経済学は、ヴァルガと同様に（スターリン支配下の）ソ連経済への全幅の信頼という性格をもっていた。例えば、今日では戦前ソ連の経済成長のかなりを政治犯などの強制収容所の労働に依存していたことが明らかである<sup>23</sup>。このようなソ連経済への批判は大塚の時代からあったが、大塚はそれらの事実を一切根拠がないと批判した<sup>24</sup>。戦後スターリン下の政治・経済の実情が明らかになっても大塚はこの見解を取り下げることはしなかった<sup>25</sup>。

要するにかなり公式的なマルクス主義者になっていたといえよう。これを文

化面で支えていたのが、次の無産者短歌論の宣言である。

「短歌に於ける根本的終極的対立は、有産者短歌と無産者短歌との対立である。この立場は社会主義的芸術観の立場であり、無産階級の立場である。この立場を一貫することのみが、短歌の表現形式、用語、格調、気魄、精神を根本的に理解せしめ、伝統有産短歌に対する根本的批判を与えしめるのである」<sup>26</sup>。

1927年のこの短歌論は当時の歌壇では独特なものであり、昭和初期の短歌運動に衝撃を与えたと評価されている<sup>27</sup>。だが、ここでいったん大塚の短歌制作は終わる。実際には、無産者短歌論を公表した1927年春以降でも、逮捕される33年1月まで、ドイツ労働詩の翻訳や組合ニュースへの寄稿のため組合川柳などを創作している。だが本格的な作品は収監されるまで詠まれることはなかった。

無産者短歌論は、「プロレタリア的自意識」の表明とみなされるが、他方でこの文化政治的な宣言以降に実作がないのはどうしてか。

本人の回顧では、やはりマルクス主義的な実践運動に傾斜したことと、また島木赤彦の死が大きい。前者については、「この期間は、私にとつて最もいい試練期であつた」<sup>28</sup>とし、政党・政治家の支援活動、消費者組合の役員と啓蒙、また無産者病院や託児所などの支援活動を積極的に行った。後者の島木の死はより大塚の短歌活動にかかわるものだろう。特に大塚がそれまで培ってきた実作は島木の影響を抜きには考えられない。その島木は人道問題や労働問題という思想が、短歌に表現されることに強い批判を表明していた。

「今の世に、哲理を取扱ったり、物資問題労働問題という如きいわゆる社会問題を取扱っている歌が、多く生硬露骨蕪雑なものが多いということも参照になります。さようなものに歌の新しさを感じるのは、目の新しさであって心の新しさではありません。(略)歌をして、もっと思想的であらしめよという希望は、歌の水平を下げよと希望するに違いないと思っております」<sup>29</sup>。

島木は思想と歌の関連をまったく否定しているのではない。「歌の領域は、個人のもつ思想感情を押し詰めて、単純なる一点に澄み入る所に拓かれてあり

ます」とも述べている。まさに彼の生涯を通じた主張であった短歌の「鍛錬道」の教えを濃縮したものといえる<sup>30</sup>。大塚がなぜ無産者短歌論以降、その実作をなしえなかったのか。そこに島木のこの発言を重ね合わせるができるのではないか。

実際に大塚がその思想感情を一点に凝縮したような新しい境地の短歌を心から発し始めたのは、彼が東京中野の豊多摩刑務所に収監されて以後のことであった。だが、その新しい歌は、無産者短歌論で想定されていたような「プロレタリア的自意識」の表明ではなく、全体主義的な体制によって生み出された孤絶の歌であった。

### 3 孤絶の歌としての大塚金之助

1933年1月10日、静岡県湯本温泉の旅館で、妻の秀子とともに宿泊しながら、大塚は岩波書店から刊行予定の『日本資本主義発達史講座』「経済思想史」を執筆中だった。このとき治安維持違反で逮捕された。罪状は日本共産党への活動資金の供与であった。大塚はその後、2月に豊多摩刑務所に収監される。やがて懲役二年執行猶予三年の判決をうけたが、検察は不服として控訴した。大塚は「転向」を書いた上申書を提出して、懲役二年執行猶予三年とする控訴審判決があり、11月8日即日刑務所から釈放された。ほぼ9か月の刑務所暮らしであった。その後、東京商大を免職になり、大塚は戦時下の日本ではほぼ失業状態で過ごす苦しい暮らしを余技なくされる。この収監時から敗戦が決まるまでの歌を、本稿では「孤絶の歌」とする。特に収監時に大塚が書き記した短歌は、それ以外の知的活動が基本的に困難ななか、大塚自身を支える最後の砦であった。まさに孤絶の歌が大塚金之助の存在そのものと化したといってもいいだろう。

ここでいう「孤絶」の意味を明らかにしておきたい。大塚のように政治的な理由で孤立した環境に押し込まれ、そこで人間関係、社会的関係をすべて抹殺されてしまう人間の在り方を、アーレントは全体主義支配の中で描いている。

「全体主義の支配は、この支配に服する人々の私的・社会的生活をテロルの鉄の籠にはめた瞬間に真に全体的になる。—そして全体主義的支配はいつもこの成果を当然ながら誇ってやまない。それによって全体主義的支配は、一方では政治的・公的領域の消滅の後にも残っている人間間の一切の関係を破壊し、他方ではこのようにして孤立化され互いに切り離された人々が政治活動（尤もそれは真の意味での政治的行動ではないが）に動員され得るような状況を否応なしに作り出す」<sup>31</sup>。

この全体主義による人間の政治的・社会的孤立は、人を「完全に見捨てられたという感情」に陥れる。アーレントは特に強制収容所に関してこの感情を説明しているが、同時にこのような感情は、全体主義的なさまざまな共同体の中でも生まれる。

「全体主義的支配のなかで政治的に体得される人間共存の基本的経験は見捨てられていることの経験なのである」<sup>32</sup>

アーレントはさらにこの全体主義の下での「見捨てられていること」Verlassenheitの感情は、“孤独” Einsamkeitではなく「孤絶」というものだという。大塚がベルリン時代に体験したように“孤独”は、さまざまな人との関係からひとまず自ら距離を置くことで自分を冷静に見つめること、あるいは自分の中の自分を省察する行為ともいえる。

孤独はいわば自らのアイデンティティを確認する行為である。ところが孤絶はそうではない。孤絶は他人との関係が断たれ、そして自ら自身との関係も断たれる。孤絶はアイデンティティの喪失と同じことでもある。世界から、そして自分自身からも見捨てられた境遇である。この境遇に陥る人を、全体主義的支配システムはあたかも最後の拠り所として自らのうちに引きずり込む。孤絶された人たちは極端な論理とアイデンティティの中で全体主義的運動に狂奔する、というのがアーレントの主張だった。もっとも大塚の場合は、「転向」ということで。一応はマルクス主義的立場を見かけでは放棄した。だが、戦時中は特高の監視下で“要視察人”として常に見はられることで、生活の困難には

直面することはあれ、なにか全体主義的な運動に参画することはなかった。むしろ刑務所にいた時よりも、出獄後の生活を背景にした短歌こそ社会とのかかわりを断ち切られた孤絶の歌を多く残している。

“獄窓時代”の短歌をいくつか列挙しよう。

監視孔に目玉が二つ光っている。いつのまに來たか、油断のならぬ。  
独房にて、ボールの空投のまねをすれば、空気を切る音がブーンと鳴る。  
見ることを許されているのは鉄窓の格子にうかぶ雲だけである。  
妹よ、このごろの夕月を見ているか、あれが獄窓の月なのである。  
網笠をかぶりてはおれど、いかほどのかすかの草の芽も見のがさず。  
窓のスズメ、月夜のヤモリ——監房のわがたのしみの数を思えり。

実際の刑務所の生活を大塚は詳細に書き残している。ちなみに短歌の方は暗記やまたは家族にあてたはがきの中に巧みに織り込むなどさまざまな工夫で世に残した。

「中野の豊多摩刑務所の未決監の一坪の独房のなかは、たたみ一枚、寝具、寺小屋式小づくえ、A5判二ページ大の一枚の原始的紙石盤、石筆(!)一本、ちり紙、食器、一杯の水、便器の雑居で、このなかで、体操をやり、検閲許可の本を読み、夜のなかでも小さな監視孔から外の黒い瞳にのぞかれ、好天の日には編笠をかぶって隔離運動場へ出て監視員に見守られながら、ひとりで約二十分の運動をする。このひまに捜検という房内検査がある。ペンとインキと一枚の封緘はがきとは、一週一回くらい別室での通信時間に許されるだけで、この通信も検閲で一行のこらずまっ黒に消されることもある。読み終わった宅下げ本は、一ページ、一ページ、つめのあとまで嚴重に検閲される」<sup>33</sup>。

何人かの論者が、この獄窓時代においても大塚は「プロレタリア的自意識」を忘れてはいなかったと指摘する<sup>34</sup>。確かにそのように解釈ができる歌も多い。

資本主義日本の国に生まれしかば、刑務所を第二の学校とせり。  
 わたくしが縛られているそのことがマルクスの正しさを証明します。  
 牢獄で読めばびたりと胸に来たガリレオ裁判の暴虐の腕。

刑務所の看守との心のふれあいに近い、特殊な環境の中でも人と人とのつながりが失われてはいない光景を詠んだ作品もある。

タンポポの歌をつくりてポケットにしおぼせて来る看手もありき。  
 人間を人間として扱えず、こころで泣くという看手もあつた。  
 相手なきキャッチボールのまねをすれば、見張りの看守も吹き出しにけり。

これらの歌は、刑務所という身体的な制約の中で、なんとか自然や肉親、そして刑務所という監視体制そのものに「つながり」を見つけようとする試みともいえる。だが、そのつながりは容赦なく現実の刑務所というシステムで碎かれてしまう。

刑務所のくらしの型にはまりきり、歯車のように押し通そうとする。  
 ひる日なか、赤い煉瓦の刑務所に、虫だけが鳴いているときもある。  
 ひとり言を寢床の中で言いたれば夜の看守にどなられたり

特に家族との関係にも歪みが現れていることは見逃すべきではない。例えば、差し入れが「贅沢」なことへの批判を書いた家族あての手紙が残っている。そこには大塚の抑圧された刑務所の日常とその心境が描かれている。

「ぜいたくな差入れだ。ぜいたくな人間が、金があるんだらう、喰ひきれないほどの差入れがある……と私はここの物笑ひになつてをります。質素でつうて来た私の評判は、かうしてむちやな差入でこわされます。どうぞ御かんべんください」<sup>35</sup>。



そして頻繁に、差入れの書籍についての実に細かい指示を送り、こと細かく生活上の注意を与えている。

「家計及家風のでつて的合理化—伝統、しきたり、感情といふ非合理を清算し、非常時処置として合理主義を採用、月八十円でやり切る位のいき込みがほしい。「先生」的気位を清算し一貧乏書生として節約を強行すべし（お母さんは別だぜ）。一、一業主義（家（うち）のおかずは多すぎる）、二、早寝早起、三、古いもの、不用本等々の売却、四、万人の飢うるとき一人の菓子を喰ふを許さず、五、家庭内サービスの全廃（家人外出の送迎、外出きがえのサービス）、六、来客せつたい全廃（とまりがけの加藤氏などは別だ）、主人が刑務所にあるからと言って何でも弁かいせよ、七、パン、紅茶、万ヂュウ等のぜいたく品の全廃…あとは次便に」<sup>36</sup>。

梅井義雄は、大塚の獄中からの書簡について、「家人にむかって、ときにはあまりにも厳しすぎる叱責を浴びせているが、これは万事について大塚が家族に最高水準のものを要求していることとともに、これらの書簡が獄中という異常の環境のなかで書かれたことを、考慮すべきであろう」と同情的である<sup>37</sup>。だが、全体主義的支配とは、またその人間関係の最小単位ともいえる家族をも損ねてしまうのだろう。この家族関係のひび割れ、家族の中で自分の位置を見失いがちな大塚の「孤絶の歌」が多く残っている。

夫婦だけの暮らしをしてはわからない啄木の歌も二つ三つある。

あらそいのあとで家族がつぎつぎと冬雨のなかをうろついてくる。

妻と母、妻と妹の一むずかしさが私の仕事をむしばんで行く

刑務所へ入っていいときめたときにこの家から逃れるという気持ちはなかったか。

夜が明ければもう母親の足音が寝ているあたまにびんびんと来る。

もちろん家族との関係だけではない。出獄後はますます大塚の孤絶は深まっ

ていく。大学を失職し、糊口を得るために翻訳のアルバイトなどをして小銭を稼ぐ日々。つねに警察の監視がつきまとい、再就職にできずにいる失職者としての境遇。立ち入りを拒むもとの職場の大学図書館。かつての友人たちの冷笑的な態度。ことあるごとに大塚は、社会関係の喪失に直面する。

にたりと友の口に出る嘲笑を忘れようとしてまた思っている。

応待まで以前とかわるこの人の口もとにかぶ軽蔑の笑。

きっかけも知りびともなく同窓会でただうつむいて朝日をすっている

酒の席で、私の前に人が寄らぬわけを酔ったあたまでじっと考える

図書館の地下食堂の片すみにて電車賃の計算をするべくなりむ

戦後まもなく、大塚はこの時期の自身を、思想警察の権力によって「社交性を完全に失」った存在だったと語っている。

「人間は社会的動物といはれてをりますから、一たん社会的活動の第一線からしりぞき、一切の社会的活動を禁ぜられ、文筆を封ぜられ、会合の出席にも遠慮しなければならず、個人的な交際もできるだけ遠慮しなければならぬとなつたならば、一体その人間は人間の名にあたひするでありませうか。さういふ人間は、急に老衰して、生ける屍のごときものとなります。私はその一つの見本なのであります」<sup>38</sup>。

## おわりに

やがて敗戦を迎え、そこで大塚の歌は終わる。生前ただひとつの短歌を集めた著作『歌集 朝あけ』を戦後二年目に出版する。なぜかこれ以降、大塚が短歌に本格的に回帰することはなかった。戦後は母校の一橋大学に復職し、そこで社会思想史、近代社会経済思想史などの講義を行い、またいくつかの著作を残している。だが敗戦直後を除いて、大塚が歌を獄中・戦時下と同じ熱量で詠むことはなかった。彼を圧迫していた体制が崩壊し、それとともに彼の孤絶も

また事実上終わった。一群の「孤絶の歌」と同じ魂の密度を持った歌は、戦後詠まれることはなかった。

ここで再び、師であった島木赤彦の言葉を思い出さざるをえない。「歌の領域は、個人のもつ思想感情を押し詰めて、単純なる一点に澄み入る所に拓かれてあります」という言葉だ。この師の言葉に大塚はあまりに厳格すぎたのではないだろうか。だが、これは憶測にしかすぎない。大塚は敗戦によって孤絶の歌と別れた。二度目の歌との別れであり、これが永遠の「歌の別れ」になった。

数少ない戦後の歌の中で、ベルリン時代の習作のような作品を紹介しておく。追放された研究室に復帰してまもない頃に詠まれた作品だ。

きらきらかがやく霜に口よせて息をふきかけている、なにかおちつかず  
に。

## 注

- 1 坪野（1981）566頁。
- 2 大塚の短歌の出典は、大塚（1980-1981）第10巻による。ただし個々の短歌の参照頁は省略する。
- 3 大塚（1980-1981）第1巻、426頁。引用文の表記は全集版に基づき、フリガナなど特に現代的用法に改めていない。
- 4 大塚（1980-1981）第1巻、406-7頁。
- 5 大塚（1980-1981）7巻、252頁。
- 6 哲学者のアラン・ド・ボトンが人間関係に意識が苛まれたときには、旅や自然にふれることで自分のアイデンティティを見直し、または確立する効用を唱えた（田中（2008）27頁）。
- 7 良知（1980）は、このドイツ留学時期と戦後40数年ぶりに訪れたベルリン郊外での大塚の自然との交感を詳細に解説している。
- 8 大塚（1980-1981）第9巻、68頁。
- 9 島木（1925/1978）33頁。
- 10 武田（2011）13頁、16頁。
- 11 坪野（1981）は以下のように述べている。「彼の滞欧作品は、正岡子規を祖とするアララギのリアリズムから多くを学び、さらに自分の個性の発露にもとづく工夫を重ねたとみるべきであろう。直接には島木赤彦の愛情にみちた薫陶をみのがすわけにはいかない。しかし厳密に言えば、習作期の作品であると私は考えるのである」（550頁）。

なぜなら「それは戦後のドイツの社会と人間が、まるきり主題にのぼらなかった点においてである」「金之助を自由に歌わしめなかった非人間的な制約があったからである。胸のつかえを率直に吐き出し得ない苦しみ、彼の歌の裏側にひそめられていることをわれわれは感じ取らねばならない。ドイツ滞留の歌を私は、「悲しみの歌」として受けとめている」(551頁)。

<sup>12</sup> 1921年8月7日の書簡。大塚第1巻、376頁

<sup>13</sup> 大塚(1980-1981)第1巻、409頁。

<sup>14</sup> 大塚(1980-1981)第1巻、407-8頁。

<sup>15</sup> 大塚(1980-1981)第1巻、408頁。

<sup>16</sup> 大塚(1980-1981)第1巻、378-9頁。

<sup>17</sup> 大塚(1980-1981)第1巻、416頁。

<sup>18</sup> 大塚(1980-1981)第1巻、355-6頁。

<sup>19</sup> 大塚(1980-1981)第9巻 3頁。

<sup>20</sup> ヴァルガの貢献については、Mommen(2011)が詳細である。

<sup>21</sup> 大塚(1980-1981)第3巻、3頁。

<sup>22</sup> 大塚(1980-1981)第3巻、80頁。

<sup>23</sup> Applebaum(2003)は、1920年代か40年代にかけてのソ連の強制収容所の労働がソ連の経済成長に多大な貢献をしていたことが実証されている。この強制労働の利用が、人的資源の非効率な利用になることでソ連の経済は失速していく。

<sup>24</sup> 当時のソ連経済の好調は、強制労働を利用した安価な労働に依存したものだという批判に対して、大塚は「このサヴェート「強制労働」には何の根拠もない」(大塚(1980-1981)第3巻158頁)と反論し、むしろ資本主義経済こそ牢獄や植民地をみればわかるように強制労働をしていると批判を行った。その上で、日本には失業保険もなく、労働者は一度失業すれば、困窮する。そのため「就業労働者の労働は益々強度になる」「文明国」のなかで日本ほど労働時間の長い国はない。これが賃銀奴隷制である」(同、207頁)。

さらに「強制労働」などといふものは、サヴェート国家の全本質に全く反するものである。サヴェート体制の下では、労働者は決定的分子であり、これと同盟してゐる農民大衆も亦た解放されてゐる。労働者の政治・文化・経済生活は、昔の賃銀奴隷制と比較にならない。森林労働者だけを見ても、その賃銀は戦前の三―四倍になつてゐる。労働時間は八時間制になつて、しかも次第に七時間制に進んでいる。なほ実質賃銀のなかに入れなければならぬ分子、社会保険、労働者保護、住宅、食堂、医療室、文化施設等々を加算すると、実質賃銀は戦前の六倍にもなつてゐる」(同、160頁)。また囚人労働はあってもそれは教化事業とソ連当局の発表を鵜呑み。「しかもこの囚人労働は、材木作業などには用いられてはいない。労働時間は八時間制であり、アメリカの牢獄のやうに十一時間も働かせてたりはしない」(同、161頁)と、大塚はスターリン体制の下でのソ連経済を賞賛していた。

<sup>25</sup> 倉田(1998)は、以下のように大塚の立場を補完している。「こうした大塚のソ連政治評価は今から考えると補完しなければならない。スターリンの途方もない陰謀とペテンが、少なくともフルシチョフの「スターリン批判」以後は判明したのであるが、

しかし当時の社会主義者、共産主義者、マスキス主義学者は、それを知らなかった。だから現在の立場から当時の人々を批判するのは酷であろう」18頁。

- 26 大塚（1980-1981）第9巻、392頁。  
 27 坪野（1981）、武田（2011）。  
 28 大塚（1980-1981）第9巻、77頁。  
 29 島木（1924/1954）62頁。  
 30 島木（1924/1954）62頁。  
 31 アーレント（2017）296頁、引用文は翻訳を利用。  
 32 アーレント（2017）297頁、同上。  
 33 大塚（1980-1981）第1巻、511頁。  
 34 良知（1978）、ねず（1979）、伊澤（1979）など。  
 35 大塚（1980-1981）第10巻、100頁。  
 36 大塚（1980-1981）第10巻、132頁。  
 37 梅井（1981）489頁。  
 38 大塚（1980-1981）第4巻、24頁。

## 参考文献

- 伊澤信平（1979）「解説」（大塚（1979）所収）287-359頁。  
 大塚金之助（1979）『歌集 人民』新評論  
 大塚金之助（1980-1981）『大塚金之助全集』全10巻岩波書店  
 倉田稔（1998）『大塚金之助論』成文社  
 島木赤彦（1924/1954）『歌道小見 随見録』岩波書店  
 島木赤彦（1925/1978）『万葉集の鑑賞及び其の批評』講談社  
 武田弘之（2011）『歌人・大塚金之助ノート』大塚会  
 田中秀臣（2008）『不謹慎な経済学』講談社  
 坪野哲久（1981）「解説」『大塚金之助全集』第9巻、541-66頁。  
 梅井義雄（1981）「解説」『大塚金之助全集』第10巻、473-97頁。  
 ねずまさし（1979）「戦時中の大塚金之助教授」『現代と思想』（35）、196-201頁。  
 良知力（1978）「朝あけ前後—大塚金之助とその短歌」『現代と思想』（31）、66-77頁。  
 良知力（1980）「解説」『大塚金之助全集』第7巻、487-503頁。  
 Arendt, H. (1955) *Elemente und Ursprünge totaler Herrschaft*, Europäische Verlag-  
 sanstalt (ハンナ・アーレント（2017）『全体主義の起源』（大久保和郎、大島かお  
 り訳）みすず書房)。  
 Applebaum, A. (2003) *Gulag : a history*, New York : Doubleday (アン・アプルボーム  
 (2006)『グラグ：ソ連集中収容所の歴史』（川上汎訳）白水社)。  
 Mommen, A. (2011) *Stalin's Economist: The economic contribution of Jenö Varga*.  
 Oxon: Routledge.